22120151

International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

JAPANESE A1 – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Thursday 10 May 2012 (morning)
Jeudi 10 mai 2012 (matin)
Jueves 10 de mayo de 2012 (mañana)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only. It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.
- The maximum mark for this examination paper is *[25 marks]*.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages. Le commentaire ne doit pas nécessairement répondre aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le désirez.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est *[25 points]*.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento. No es obligatorio responder directamente a las preguntas que se ofrecen a modo de guía. Sin embargo, puede usarlas si lo desea.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es *[25 puntos]*.

© International Baccalaureate Organization 2012

次の **1** の文章と **2** の詩のうち、どちらか一つを選んでコメンタリー(解説文)を書きなさい。

1.

私は父親の四十なかばの初子で、そのせいか極端にひっこみ思案であり、幼稚園でも小学校でも、一人で級友の中に立っていられないような子であった。学校で、大勢の中で、自分一個の立場を守り、他との平衡を維持し、おくれぬように競いあう、そういうことを考えるだけで息がつまりそうになる。

登校の道で、まっすぐ歩いていってしまうと学校に行きついてしまうことがわかっているから、どこかで曲がってしまいたい。しかし、そういうことをしてはいけないんだという気持ちのほかに、朝の道というものは、三々五々、子供たちが同じ方向に歩いているような具合で、その濃い連帯のようなものを一歩はずれるということがなかなか力がいる。一方、だんだん近づくから、行き着いては困るという気持ちの方もつのってきがならなくなるわけで、次の横丁で曲がろうとして果たさず、今度こそと気を張り、とうとう曲がっちゃったとき、空中をダイビングする虫になったような気持ちのよさ。そして一歩曲がってしまえば、たちまち脱落感。歩を進めるたびに、今頃、朝礼がはじまっているだろう、教室で教師が出欠をとっているだろう、今から駆けつけてまだおそくはないが、こうして逡巡しているうちにとりかえしがつかなくなっていくのが何にも代えがたく大事で、身体が小さく干し固まっていくような気分になる。

私はトボトボくよくよと、電車通りをどこまでも歩いていき、果ては上野公園とか、青山の墓地とかにたどりつく。そうして、とにもかくにも、先に行って破局はあるにせよ、その前に、家へ帰るまでのたっぷり七八時間ぐらいは、余人を交えない平安なときを楽しめるのだと思おうとする。

公園では、人の眼に触れないような植え込みの奥へ奥へと入って、草叢の中にしゃがんでいる。見えるのは　頭上の空だけであり、その果ての方で町の騒音が高鳴っている感じだった。いくらか高学年になってから、その騒音の方に行ってみたくなり、さらに歩いて下町の興行街や相撲場や野球場でときをすごした。そこでは学校とちがって無責任でいられたが、そのかわりいつも孤独な見物人だった。

私はそういう場所で子供料金を払っていたから、したがって、小遣銭を、家に帰ってから盗み集めねばならなかった。電車やバスにも乗らなかったし、買い喰いもしなかった。街のあちこちで、大勢の人の生き方をただ眺めているだけだった。それでも、或いはそれだからこそ、子供の私には不相応の小遣いがなければ日が保たなかった。私は母親の財布を狙い、父親の財布を狙った。父親には再三にわたって馬鞭で殴られた。けれども私は必死だった。父親はその挙句、財布の置く場所を転々とするようになった。そうして私は、それをすぐに見つけた。家に帰ると、一心不乱にそのことばかり考えた。父親は財布を、寝るとき以外は身から離さぬようになり、狙うとすれば、朝起きだして顔を洗う、その一瞬の間にやるしかなくなった。私はそのことにも練達した。(中略)

当時の興行街はたいがいいつも満員で、簡単に便所へも行かれないような具合でもあるのだが、そういうときというと私は思い切りが悪く、身体が馴染んだ場所から身を剥がすことができない。舞台の状景など眼に入らず、居ても立ってもおられぬくせに、幕がおりるまで、瞳を硬くし、かぐろい塊になって座っている。そうして下校の時間になるとはじめて席を立ち、表の世界の何事もない様子にほっと安堵しながら、今度は人を突き飛ばすほどの勢いで、一散に家まで走って帰る。下町から山手の生家まで、息をきらし、小休みもなく走った。朝とちがってのうのうと歩いてなどいられなかった。まるで、身体を痛めつけ、そこで苦しみさえすれば破局が遠のきでもするように。

或いはそうやって戒律の空気を保つことによって身体のバランスをとっていたのかもしれない。いくら、私が自堕落でも、気楽に遊び浮かれているだけの日日だったら長続きしなかったろうと思われる。

そういえば、あの頃もときおり、こんなことを思ったものだ。どうして自分はこうまでして家に帰るのだろう、いつもいつも帰らねばならぬのだろう。せっかく、力づくで自分が狙い定めた場所に出てきているのに。これではまるで、家に帰る苦労を積むために外へ出てきているようではないか――。

（色川武大『生家へ』、一九七七年）

– この抜粋文では、筆者の子供時代の性格はどのように示されていますか。

– 筆者にとって、「生家へ帰ること」とは、何を意味すると考えられますか。

– この抜粋文における文章の特徴、表現方法について考えるところを述べなさい。

2.

未来く

父が語った。
御覧　この絵の中を
橇が疾く走っているのを
狼の群れが追いかけているのを
駆者は必死でトナカイに鞭をあて
旅人はふり向いて荷物のかげから
休みなく銃を狙っているのを
いま銃口から紅く火が閃めいたのを

息子が語った
一匹が仕止められて倒れたね
ああ　また一匹躍りかかったが
それも血に染まってもんどり打った
夜だね　涯てない曠野が雪に埋もれている
だが旅人は追いつかれないだろうか？
橇はどこまで走っていくのだろう？

父が語った
こうして夜の明けるまで
昨日の悔いの一つ一つを撃ち殺して
時間のように明日へ走るのさ
やがて太陽が昇る道の行く手に
未来の街はかがやいて現れる
御覧
丘の空がもう白みかかっている

（丸山薫「未来く」『涙した神』一九四三年）

（注）
疾く　はやくの意。
駆者　御者の意。
涯てない　果てのないの意。

– この絵の中で、子供に強烈な印象を与えているのは何であると思いますか。またこの印象はどのように表現されていますか。

– 父親はどのようなことをどのような方法で子どもに伝えようとしていますか。

– この詩における表現技法の特徴およびその効果について、考えるところを述べなさい。